オネスト！

小沢　恭

「お前、わい等と違ぅて学あるやろが、戦争が終わったちゅうのはどういうこっちゃ、言うてみい！」上官からの関西弁が最下級二等兵の僕に浴びせられた。

（なんだ、そんなことが尋常小学校卒程度のお前らでは判らないのか）

「終戦とは判りやすく言いますと、えーつまり日本が降参したということであります」質問に僕は明快に答を示してやった。途端にそいつはヤクザに豹変した。

「なんやとっ！日本が負けるわけないやろが！どアホ奴がっ！お前はほんでも日本軍人かっ！参ったんはアメリカやろが！ほいで戦争が終わったのやないけぇ！」罵詈とビンタを食らった。更にその後が悪かった。取り巻きの古兵らに号令した。

「おい！。このドアホ奴、皆でいてまえ！」もともと私刑が公認なのが軍隊だ。それが命令となると弱肉の見本の僕はふくろ叩きにされた。顔はふくろうのように腫れ上がり前歯が一本欠けた。

昭和二十年八月ごろ、北シナ（現中国北部地方）は蒸し暑い日が続いていた。僕の部隊は形ばかりの討伐作戦で田舎廻りをしていた。無線の故障もあって外部との接触が途絶え袋を被らされた猫になっていた。そこへ突如終戦の噂が独り歩きして伝えられたのだ。

日ならずしてシナ全土の日本軍隊は在留邦人も併せてそれぞれ最寄りの港に集められることになった。部隊も汽車不在の鉄道に沿って長旅の行軍を続け、たどり着いた処が北シナの塘沽港だった。それまで塘沽なんて名さえ知らなかった。判ったのは、ここに上陸してきた米軍海兵隊が旧日本紡績の倉庫を俄か捕虜収容所に仕立てて、旧日本軍人を抛り込んでいたということだった。

敗戦後・・・塘沽捕虜収容所に落ち着いて何ケ月か経った。晩い秋の風が心寂しく吹き荒れていた。消えたはずの大日本帝国陸軍の軍隊生活と軍律がまた甦っていた。何ひとつ情報らしいものは伝わらないまま僕はここで制裁られ続けた。ただ宿舎清掃、食事手配、

洗濯、汚物廃棄など、動いている間はやられずに済んだ。

「田代！お前、すぐ将校室へ来いっと！」兵士用の厠（便所）で使役についていた僕に命令？が伝えられた。上官が馬の骨であってもその命令は絶対であり、僕の答えは、常に「諾」であらねばならなかった。

（戦争は敗戦った。負けたんだ。だから軍隊もなくなったんだ。上官なんていないんだぞ）意識は囁いていた。が（早く行かんと制裁れるぞ）の声が僕のいじけきった脳を支配していた。「わっかりました！」清掃道具を抛り捨て駈けた。廊下は暗く長く僕の気は重たい。

「田代二等兵、参りました」将校室に入ると、のらりくらりと雑巾掛けしていた当番兵が大げさに鼻を押さえた。先刻まで肥担桶を担いでいたんだ。手を洗ったくらいでは服と身体に沁み込んだ臭気は抜けないのだろう。

殴られる覚悟をしていた僕だったが、後は八木（二元）少尉殿一人なのを見て心が緩んだ。八木さんは兵から叩き上げた部隊最年長の職業軍人だった。徴兵された初年兵でアゴだけ達者だった僕は「文句じゃ」と古兵どもの格好の餌食になっていた。殴り倒され血だらけでのびていた僕を見て諭してくれたのが八木さんだった。

「お前な、軍隊ちゅうところは何ごとも辛抱やど。軍隊はな、鬼も居るが仏も居るんや。それにな、生きとればまた良えことあるしのぉ・・」信仰を持たぬ僕だったが仏様が庇ってくれたと感じた。それから僕の面の皮も厚くなり、馬糞入りの味噌汁を飲んでも生き延びてこれた。

「お前、上海に永いことといたんやし、英語も相当いけるのやろ」人事係りだった八木さんさんは僕の履歴を覚えている。

「多少ならであります」偏狭なお上は英語を敵性語と認定し使用を禁じていた。

「そう遠慮せんでもええよ」八木さんは目を細めた。

（英語がなんで出てくるのだろう？）僕は掠めた疑問を噛み殺した。

「今居る塘沽はな、天津、北京を結ぶ北シナ最大の港やそうや。ここの米軍がな、日本の兵隊と在留邦人の内地送還を始めてるんやて」京都弁が続いた。八木さんはなにか本部で仕入れてきたらしい。米軍と旧日本軍との折衝を言葉の壁が大きく阻んでいる。それで米軍が英語の話せる日本人を求めているのだと。

「お前な、通訳の募集に行ってこいや。オレな、大隊本部で言われたんや。誰か良えの居らへんかって。学校卒た将校は何ぼでも居るというたかてアホばかしや。誰も英語ようしゃべれんし字ぃかて読めへん。お前、アメリカの学校卒てるのやし、オレな、お前しかな

いと思うたんや」

「そんな・・・自分はアメリカの学校など卒ていないであります」何故話がそのように飛躍(とん)でいったのだろう?。僕は八木さんの下にいて帰国の時を待っていたい、と断りを入れたのだが。

―英国人(ジョンブル)が創り上げた上海租界は、数十ケ国の人種、八百万人がブチまけられた玩具の箱だった。異種の風習と文化と猥雑(わいざつ)、外国人の優越感とシナ人の劣等感が溶け合っていた。

父は若き日、上海に渡って事業の成功を得ていた。その上海に僕は生まれ育ち、幼いころは英国系の幼稚園で英、米人に囲まれ、家庭ではシナの阿媽(アマ)（女中）を使い不自由を知らずに二十年育った。だから僕にとっての上海は人の恐れる魔都ではなく故郷でしかない。だが祖国日本は軍国主義に支配され、満州、上海、シナ事変と戦争は広がり続け、大国の驕りに負け、ついに世界を相手にしてしまった。

内地に渡り大学に進学したが、そこで見たものは言論、行動、思想などの締め付けに脅える無力な国民の姿だった。さらに食料、物資の統制で国民は日々飢えに喘いでいた。

海ひとつ超えた上海には自由と全てがあった。危険を侵して幾度となく帰省した。

厚い天津絨毯が敷かれた部屋に、ジャズが響き薫り高いコーヒーが滾っていた。

僕の好みのアメリカ煙草、キャメルはマホガニーの棚に梱包(カートン)で積まれていた。高級煙草は英国製のウエストミンスター、スリーキャッスルで占められていた英領植民地上海だ。

「アキラ！お前ようそんな臭いアメ煙草ばかり吸うなぁ」悪友にからかわれても、

「るせぇんだよ」顎をしゃくった。ベージュの駱駝が箱に浮んだキャメル、そのヴァージニア葉混(ブレンド)の煙は僕にはたまらなかった。それは僕にとって上海の香りそのものだった。

この頃、内地でも上海でも殆どの日本の成、壮年男子は町から姿を消していた。健やさと精力を持て余した身体を国立大の金ボタンに包んだ僕は、寄ってくる女の子には手を出してやるのが嗜みだと思い上がっていた。

僕は休暇を勝手に延長し遊び続けた。それは必然的に教練の課程をサボリ続けたことになった。この自らが創り出した錆が僕の運命を大きく左右することになるとは思いもしなかった。学校に配属された将校は僕の成績簿の軍人適性欄に、将校絶対不適と殴り書きして唾を吐き棄てていたに違いない。なぜなら学友の殆どは陸、海軍将校に飛び級の恩典に浴して入隊していったのに、僕にはなにひとつ良い報せは届いてこなかったのだから。―

「お前の履歴書な、本部にええかげんに書いて出して来たんや。ほれになぁ。ここに居ったらいつ還れるか判らへんやろ」八木さんは溜め息をついた。
「英語はとにかく・・・」それよりも僕は頭の痛い心配をしていた。
「自分は拾った雑誌を読もうとしたのでありますが日本語も判らなくなっているのであります」僕は痴呆症になったのかと苦にしていた。
「何でや？字ぃ忘れたと言うんか？」
「いいえ、字は読めるのであります。が、意味が頭にはいらないのであります」
「ハッ・ハッ、それで本が読めんと言うんか？」八木さんは嬉しそうだった。
「読めても何が書いてあるかが解らないのであります。頭を叩かれすぎてアホになっていると思うのであります」
「ハ・ハッ、そらぁ別におかしないで」八木さんはまだ笑っていた。
「なぜでありますか？」
「そらぁ軍隊ボケちゅうんや。誰でも皆一度はなるんや。こいつは治りにくいでぇ」
「はぁ？治らないのでありますか？」僕は不安になった。
「治ることは治るのやが、ただ、ちょっと特別な薬が要るわなぁ」
「なんという薬でありますか？」
「ひにち薬という奴ちゃで」八木さんは自分のしゃれに身体を揺すり粗末な木箱の上に置いていた肘を滑らせた。床に紙箱が落ち写真がこぼれた。軍装の八木さんと女性、女の子が中に挟まれている。女性は奥さんだろう。出陣を前にした暖かい家庭が滲んでいた。
「娘なんや」写真を拾い上げて呟いた。苦笑いのまなざしは父親の目でしかなかった。
「でもわしなぁ。お前がうまいことやってくれたら故郷（く に）に帰れるかいなぁと。ここに居たかて、いつ還れるか判らへんやろ。国を出てもう八年や。わしも帰りたいでぇ。田代！頼むわ」八木さんは声を落とした。
　僕にはどうなるのかさっぱり判らない。でも八木さんの頼みとなれば断り切れない。僕にも今は引き揚げた父の居る日本への帰心が沸きあがってきた。
「自分は何をすれば良いのでありますか？」
「明日、試験が向こうであるんやて」アゴの先は（占領軍兵舎の方角）を指していた。
「自分は試験に自信もありませんし、そんな所に行っただけでも古兵殿に怒られるだけだと考えるのでありますが？」それが一番苦になっていた。
「大事ないよ。大隊長殿も諒解しておられるんや」渡されたのは隣接する米軍兵舎内の試

験場の図面だった。筆記具持参と註がある。
（筆記具なんて・・そんなもの何処に有るんだ？）僕は目で笑ったら、八木さんは黙って手を差し出した。その手のひらにちびた鉛筆が載せられていた。
（このオレが英語の試験か？）とにかく一瞬であっても束縛されることなく一人で外に出られるなんて夢のような話に途惑っていた。

米軍発行の外出証を米軍歩哨に示し、鉄条網に囲まれた収容所を出た。振り返ると元は倉庫だった建物は内も外観も暗く汚い。
表は晩秋の陽に公孫樹が眩いほど明るかった。僕は始めて娑婆の空気がどれだけおいしいものか判った。塘沽の町は遠くに霞んでいたが、大通りは星条旗と米軍兵が溢れていた。白人、黒人の兵士が相乗りしたジープという名の小型自動車が珍しい。見たこともない装甲車、運搬車などの多彩な機動力が町をうずめていた。
目的の米軍の基地は向いの高台にあった。兵舎の入り口にも自動小銃を抱えた米軍歩哨が屹立していた。門柱の隅に元日本人小学校の名札が未だ架けられている。此処は元日本人学校だったんだ。先立って元日本将校殿の一団が入っていった。受験に来たのだろう。階級章を毟られても元軍隊での階級は軍服、靴、帽など外見の良し悪しで判断できる。薄汚い軍服の僕は下級兵士だとすぐ判っただろうが、将校の後ろに付いてすたすたと歩いたからか米軍歩哨は別に注意を払おうともしない。彼らは降服した日本軍は猫よりも温和しく鼠より臆病なのを知っているらしい。

試験場に校舎の一部が宛てられていた。表に【ＥＸＡＭＩＮＡＴＩＯＮ・ＲＯＯＭ・しけんば】と書かれた紙が張られている。ちょっと変だが、これは米軍所属の日系二世の手になる【試験場】の意であろう。
入り口付近に立ち停まった僕は「邪魔だっ！どかんかっ！」怒鳴られ殴られた。見たこともない将校服の男だった。慌てて敬礼して裏へ隠れた。横窓から覗くと試験場には三十人ほど入ったようだ。みな厚手のサージ服の元将校どもばかりだ。互いに敬礼したり挨拶したりしている。兵隊は一人もいない。僕は自分の汚い兵隊服が恥ずかしく思えた。僕は冬近い今でも着たきりの半袖夏服だった。薄くなった生地は絽のように透いている。匂いを嗅げば臭いだろう。そんな乞食兵士が試験を受けに来るはずがないのだ。やはりここは僕の来るところではなかった。

「頼むで」といわれた八木さんに申し訳ないが『お前はっ！舐めとるんか！』と拳を振り上げた鬼の古兵らを思うと足が萎えた。それに部屋に入れば将校らに場違いだとド突かれて摘まみ出されるのがオチだろう。外に将校の姿が消えていた。僕はまた入り口付近に来てうろうろしていた。

入り口の扉が閉められた。もう中では用紙が配られている。

（これで良いんだ）と割り切れた。逃げるなら早い方が良い。が、皆、試験場に残って居るのに僕一人だけどうやって此処から出よう？全部一緒なら歩哨も通すだろうが。無意識に『将校に試験を止められた』などという浅ましい嘘と言い訳を考えていた。

入隊前、日本の軍隊は戦友愛で築かれた皇軍であると教えられていたが、軍隊に放り込まれた僕の理解した限りでは、ただの武器を備えた暴力集団だった。

娑婆ではありきたりの人間を、容易く人殺しにさせ、その逆に命を棄てさせるにはリンチも一つの手段だったかも入れない。生命の不安、命令の徹底、抑圧された生活、蓄積されたストレスの解決に、虐めが自然発生したのかもしれない。しかし対象にされた下級兵士は堪ったものではない。

与えられたものは生命を維持するだけの貧弱な食事と、員数という名の割り当て備品だけだった。それ等の破損、紛失には血と涙で償わされた。逃れるには、嘘をつくか泥棒するしかなかった。僕にとっては、どちらも命がけの必要悪だった。そして上下の差別には天と地の隔たりがあった。

（早く戻らないといかん！）焦っても、ここは日本ではない、シナの港、米軍基地の内だ。僕のいる場所はいやでもあの収容所しかない。あたりを見回しても散在している米軍兵士らは僕の存在に無関心だ。建物、廊下の蔭を縫って横走りに動いた。二十二歳の若さが蟹か、忍者のように素早く軽快に動いたつもりだったのだが・・・。

僕の体は浮き上がり身動きが取れなくなっていた。つまずいたのではない。

「ダン　ムー」―動くな！。後ろから低い声が響いた。

顔をずらして振り向くと、団扇のような手とド太い腕が僕の首筋をつかんでいた。腕の主を見上げると巨大な身体を米軍服に包んだ黒人兵士だった。顰めた眉が不審な奴だと詰っているようだ。怯えきった僕の眼は焦点が定まらない。

「オゥ、ヘルプミイ！」僕の口は咄嗟に英語を口走っていた。いや、英語には間違いなかったが、それは僕が子供の頃しゃべったアメリカの幼児言葉だった。標準の英語が浮んでこなかった。

「タスケテオクレヨ」また俗語（スラング）の英語を吐き出してしまった。反射的に黒人兵士の口が半開きになっていた。が眼を僕に据えたまま一言も発しない。

（判らないのかな？）昨日までの敵に怖くなった僕は、

「ボカァ何もしていないぜ。ボカァね、帰らなきゃいけないんだからネ！」無意識にスラングを連発して哀願した。口は酸素が欠けた魚のように喘いだ。

兵士の力が少し弱くなった。手を首からそっと離してくれたので僕はそのまま身体の向きを変えた。顔が見えなかった。僕の頭は彼の顎の下にあった。上海で大柄な外人には慣れていたはずの僕も（こいつは化け物だ）と瞬間的に背筋が冷えた。

「お前は英語を喋れるのか？」上から黒人特有のかすれた声が落ちてきた。

（化け物が口を開いた。僕の言葉をきいていたんだ！）

「少しだったら話せます」この兵士には少なくとも悪意は感じられなかったから、僕は落ち着いてきた。

「お前は将校でもないのに、なぜ英語が判るのか？」彼は眼を僕の軍帽から軍靴まで走らせている。僕が将校ではなく、下級兵士だとすぐ解ったのだろう。まるで将校だけが英語を理解できると思っているかの口ぶりだ。

（兵士はみな英語が判らないと思っているのか？）とも訊けなかった。

「なぜって、僕は英語なら前から知っているんです」

「なぜだ？」

「私は上海で英国の幼稚園にいましたから」思いつくまま告げた。

「お前は一体何者なんだ？」また質問が浴びせられた。

（まだ僕を怪しい野郎だ、と思っているんだな？ヤバイ！）僕は気お付けの姿勢をとって敬礼した。卑屈といわれてもこれが暴力予防の特効薬だと経験が僕に教えている。

「私は陸軍二等兵、いいえ、元二等兵で、名前はアキラ・タシロであります。怪しいものではない、のであります。U．S．A．将校、殿（サー）」僕はサーの敬称を使った。

自分が捕まえた日本兵から「将校殿（サー）！」と呼ばれた黒人の顔に戸惑（とまど）いの色が浮かんだ。

「お前はなぜここにいるのだ？まさか試験に来たのではないだろう？」

「いいえ、です、いや、はい、です。試験を受けにきた、いや受けて来いと言われて来たのであります」文法が乱れている。しばらく英語を話したことがなかった。言葉は使わないと消えていくのかと焦った。

「ではなぜ試験場に入らずに逃げていくのかね？」言葉が少し優しくなっていた。だが（何

か悪いことをしにきたのではないのか？）疑わしそうな目付きが咎めている。

「いいえ、逃げたのではありません。私ははじめから試験には興味を持っていないのであります」僕は直立不動の姿勢で標準英語（キングズ・イングリッシュ）に戻っていた。竦めた首を伸ばし「将校殿！」を加えた。僕は敬語を連発した。

「まぁ落ち着けよ！」黒人兵士はおし留めるように両手を拡げて僕に坐れと示した。しかし彼自身はうろうろして坐ろうともしない。

（落ち着くのは貴方のほうですよ）僕も言いたかった。

僕は改めて彼の巨体を見上げた。身長は二メートルをはるかに越えている。それを支える靴は五十センチほど。黒い顔の中に目と歯だけがやけに白い。その眸の中に平和な温かさを感じた僕の両肩から力が抜けた。いや身体の力が抜けた。

「お前はまだ若いな。その顔のあざと傷はなんだ？。なにか悪いことをして殴られたのか？。それにお前は汚いし臭いな。着ている服は夏服ではないのか？」彼の質問が変った。

垢がこびりついた首筋、継ぎ接ぎで汗と脂の染み込んだ服、物乞い同然の僕の風采を見て、笑いを堪えているようだ。

（好きで汚くしているわけじゃない。自分だって嫌になっているのに、返事が出来るか）

悔しくて黙り込んだ僕を見て、彼は椅子を引きずり出し向かい合うように座った。二百キロ近い体重に椅子は悲鳴を上げた。

「オレは悪いことを訊いたようだな。オレはお前が言うような将校ではない。上級曹長（マスターサージャン）ハンクと言うのだ」分厚い唇が語った。幾筋かの（横くの字）が刻まれた腕章を叩いて、下士官でも上級なのだぞと誇らしげに示した。

僕にも判っていた。傍らを通る米兵達の殆どが彼に敬礼していたから。

「ではなぜお前は試験を受けようとしなかったのかね？」まだ訊いてくる。

「私は階級の低い兵士であります。その私がもし試験に受かり通訳になったとしても、私の言うことを誰も聴くわけがないのであります。まして命令することなど、とてもできはしないのであります。恐らく私は命令する前に殴り殺されてしまうでしょう」

僕はゆっくり発音した。その間に脳の奥に永く蔵（しま）い込んでいた英語を模索していた。次第に豊富になった語彙（ボキャブラリ）は明確に発音され、ハンクを魂消（たまげ）させたようだ。逆にハンクは黙り込んでしまった。彼の沈黙を諒解と受け取った僕は饒舌になった。

「私は元々臆病な人間であります。それでも戦場に赴くのは国民の義務であり運命だからと諦めていたのであります。日本の軍隊は狂信的に階級差別が厳しく、下級兵士には毎日

が殺されるほどの制裁戦争が続けられたのであります。自殺したものも少なくなかった・・・のであります」座ってもなお、山のように聳えるハンクを見上げたが真剣な顔で聴いてくれていた。

「その私でも負けるはずがないと聞かされていた自分の国の敗戦を知って悲しく思えたのであります。それでいて、もう殴られずにすむ、これで良かったのかと矛盾した心に動転しているのであります。戦いで命を捨てるのなら兵士でも軍人である以上諦めるのでありますが、戦いが終わった今になると、もう昔の階級差別で私刑（リンチ）されたくはないのであります」試験から逃げた理由を演説してやった。野蛮な敵と信じこんでいた日本兵が率直に英語で語ったことで、これまでの日本兵に対する偏見が少し薄れてきたはずだ。

「日本軍隊は階級差別が激しくリンチもひどいと言うが、それはアメリカでも何処の国の軍隊でも同じだよ。オレ達黒人はその上、人種差別さえも味わっているのさ。それよりもオレに判らないことがある。日本が負けて戦争は終わったのは確かなことなのだよ。それなのになぜ軍にまだ階級があると言うのだね？」

（これは駄目だ！彼には僕の告げたことがまるで理解されていない）

「オレと彼が数万の日本軍の中から探していたのはお前のような兵士だったんだ！お前はオレが見つけたんだ」なにか勘違いしているのか、ハンクが場違いなことを口走った。

「オレと彼って？誰のことですか？私には貴方の言うことが判らないのであります」

「お前には、判らなくても良いのだ」

「良くはないのであります。繰り返します。私がここで働かされ、上官に命令するようなことになればどんな制裁が待ち受けているか、貴方には判って頂けないのでありますか？」言い知れぬ恐怖を感じて僕は口を閉ざした。

（どうしたらこの男を説き伏せることが・・・）眼を遠くに走らせた僕にすばらしい智慧が閃いた。悪戯小僧のような微笑が浮んだ。

「ハンク曹長殿！」改まって告げた。

「何だ？」

「ご覧ください。あちらの試験はもう終わったようであります」

試験場の窓越しにペンを止めている将校達が見えていた。

「そうだよ。試験はもう終わったのだよ」

「残念ですが私は試験を受けそこねたようであります。ですからもう帰ってもよろしいのでありますか？」安堵した顔になって伺いをたてた。

「お前はそんなに慌てて帰らなくても良い。試験のことなど心配しなくても良いのだ」
ハンクも悪戯小僧のように真っ白な歯を見せた。
「もう合格者は決めた、いや決まったのだよ」
「何のことでありますか？私には貴方の言うことが判らないのであります」
「実はな、主任試験官はこのオレなのだよ」ハンクは人差し指を曲げ、自分の壁のような胸板をトントン叩いた。
「はぁ？」僕はまた混乱してきた。
「もっともオレは先にそれを言うのを忘れていたがね」ハンクが弁解らしいものを加えた。
「ご冗談でしょう。あなたは先刻からずっとここにいたではありませんか」
「説明を加えておこう。オレ達は沖縄から転じた海兵隊なのだ。地域の最高責任者はスミス中佐である。彼は北支の日本軍捕虜、在留民百万を本国送還せよとの命を受けた。輸送手段はランディング・シップ・タンク、略してＬＳＴ（エルエスティ）だ。この船は敵前上陸用に製られたもので上陸には鋼板が倒れて開き戦車を押し出す。武装兵員なら千五百人は運べる。だが毎週二隻がやっとだ。あとの手配は予測もつかない。そこへ送還される日本人が列車で毎日運ばれてくる。宿舎も不足する。建設、輸送の使役には人が足らない。日本人には言葉が通じない。わが軍には日系二世もいるが彼等は日本語を話せても読み書きはほとんど駄目なのだ。とにかくオレ達は困っているのだ。で、米日間の通訳、翻訳者を日本軍捕虜の中から募集することにしたのだ」
船や宿舎の話は初めてだが、他は八木さんに聞かされていたので別に驚かない。
「良い方法を選ばれたと思います。何万という軍隊がいるので十分可能でしょう」僕はあの暗い倉庫の群れに密集した日本軍隊と将校たちを思い浮かべていた。
「オレたちもそれが名案に思ったのだが、うまくいかないのだ」ハンクは可笑しいのか笑い出し、「なぜだかお前に判るかね？」と質問に変わった。
「自分にはさっぱり解らないのであります」
「それはな、募集に応じてくる奴は将校ばかりなのだ。なに、彼等は外見で判る。昨日までオレ達の命を狙った日本の将校どもを好かぬのは士官学校（ウエストポイント）出のエリート、スミス中佐もオレも変らないのさ。オレと彼とは硫黄島から共に戦ってきた。二人の間には年も階級も肌の色の違いもないんだ。それでオレが『これればかりはいかにスミス中佐殿でも無理でしょうな』と皮肉ってやった。するとスミスが『お前はオレよりよく世間を知っているからな、これからお前がやってくれ。それが早く決まればオレはますますお前を気に入るだろ

うぜ！』と弱音を吐いた。『冗談じゃない！中佐殿が決められないものをなんでオレが・・・』するとスミスが命令口調に変った。『エー・・気を付け！地区司令官であるスミス海兵隊中佐は、ハンク海兵隊上級曹長を募集の主任試験官に任命する！これは命令である！』オレだって、クソジャップの、オゥ、ソリー、日本将校の奴等と仕事ができるかって。と言っても万ヶ一、兵隊の中で頭と性質（たち）の良い奴が見つかろうもんなら隊長殿も喜ぶだろうしオレも鼻が高いというものだが」ハンクはぼやきをいれたが僕は嫌な予感がしてきた。

「オレは問題を試験場に置いて来ていたが、成績なんて関係ないのさ、将校なら必ず中佐殿がペケだ。今日も来ていたのは元将校どもばかりだろう。オレも頭が痛いが、試験官となれば威厳ある存在で軽々しく現れるものではないのだ。オレは後から悠々と教室に入って行くことにした。でオレは廊下の隅で腰をおろし試験場に眼だけ走らせていたのさ。そこへ現れたのがお前だったというわけさ」

椅子が軋んだ。ハンクが巨体を起したのだ。思わず僕も釣られたように立ち上った。

ハンクは人差し指を伸ばして僕に向けた。

「主任試験官であるハンク上級曹長はここにお前、アキラ・タシロが米軍の試験に合格したことを宣する！」

僕がハンクに腕を執られるようにして連れて行かれた広間は米軍の本部だった。何十人かの米軍兵たちが机を並べていた。それぞれタイプを打ちペンや受話器を手にしている。奥には星条旗が棹を砲弾の薬莢に挿して飾られていた。旗の前の大きなデスクに年若い将校が座っていた。

「スミス中佐殿である」ハンクに告げられる前に僕は雰囲気で察知していた。僕はここでも直立不動の姿勢をくずしていなかった。

ハンクは中佐に向かって敬語を交えてはいたが、両足を開いた緩やかな姿勢で僕を連れてきた経緯（いきさつ）を報告していた。中佐といえば上級曹長でさえ問題にならない神様なのにハンクの無礼を咎めるでもなく微笑みながら頷いている。

「この兵を見つけてきたのは自分であります。あとは中佐殿から直接に聞いてください」

腰に手を当て反り返った。

（上官に対し態度のデカイ部下だな。これが日本軍隊なら袋叩きの半殺しだぞ。でも誰がこのデカい奴を叩けるのだろ？）問答を聴いていた僕に余裕が少しあった。

中佐は明るい笑顔を僕に向けた。短く揃えられた金髪、透き通った碧眼は穏やかで知性を湛えているようだった。

僕は一揖(いちゆう)して目を伏せた。乱雑なデスクの上に駱駝(キャメル)が描かれた煙草の箱が無造作に放り出されている。スミスの指に軽く挿まれた煙草(キャメル)からは、ゆるやかに紫煙が流れている。懐かしいヴァージニア葉の甘い香りだった。

（オレが萼(の)んでいたキャメルだ！）引き据えられた僕はその煙を無意識に吸い込んで大きく息をはいていた。なつかしい上海の郷愁がそこにあった。

中佐の目は手元に引き出された書類に注がれていた。八木さんが認めた僕の履歴書らしい。横の英語は二世がいい加減に書き添えたのだろう。

「お前は国立の大学を卒業しているというのに、なぜ将校に成らなかったのかね？」スミスはいきなり早口の英語で訊ねてきた。

「私は将校にならなかったのではありません。本心は将校に成りたかったのであります。だから学生時代、海軍にも陸軍にも志望したのであります。しかし成れなかったので、徴兵された後も懲りずに志願したのであります。それでも成れなかったのであります」

「なぜ成れなかったのだね？」スミスの表情は少し穏やかになっていた。

「多分私の性質が悪いと認定されて将校試験に落とされたのだと思うのであります。それから私は軍隊も将校も嫌いになったのであります。私はそのようにケチでダメな人間であります。それからその経歴書は私が書いたものではありません。以上間違(オネスト、サー)いありません」

僕は直立の姿勢をとり中佐の襟に光る銀色の徽章に吸い込まれながら淡々と告げた。スミスは年齢、卒業校、兵になるまでの経歴などを改めて訊ねた。

上海で生まれ、相次ぐ戦争に親しい外国の友と皆別れ、大戦に故郷を捨てた後、大学を卒た。直ぐ兵徴(と)られ北シナ（現中国）で部隊は田舎廻(どさ)りをしていた、という僕の履歴は単純過ぎたか。後ろでハンク曹長は園児の入校に付き添った父親のように目を据えていた。

質問を止めてスミスは突然僕に語りかけた。

「オレにもな、故郷にお前の年くらいの弟がおるのだ。オレが太平洋戦線に発つとき『なんで殺し合いなんかするんだ！』と泣いていた。だがな、戦争はな、お互いに国のためには仕方がないんだ。お前にはこれまでに見た日本将校達の卑屈さに隠れた傲慢さがまるでない。裕福な家庭、自由を謳歌していた学生。急激に墜ちた軍隊生活に自分を見失っているようだが、まだ正直な人間らしさは残されている」

スミスが出し抜けに立ち上がった。左手が前にさし出された。僕は殴られるのかと無意

識に後ずさっていた。が、スミスのその手はデスクのキャメルの箱を掴んでいた。空いた右手の親指で箱の底をピンと弾くと、タバコが一本だけ器用に箱から飛び出した。

僕の前にそのタバコの箱が突き出された。僕はスミスの目を見てタバコを見た。僕には判らない。スミスがまた箱を突き出す。タバコは箱から飛び出したままだ。同じことを繰り返している。一体どうなっているのだ。思わず振り返るとハンクが親指を立てて顎を縦に振っていた。（ゴゥ！ゴゥ！）口笛でも吹くように唇が尖っていた。

（タバコをとれ！中佐殿がお前を気にいっているのだぞ）と言っているように見えた。

僕は礼を言って恐る恐るキャメルを手に取った。カチッと軽快な音が鳴って火が差し出された。それは中佐殿の掌に載ったジポーのライターだった。この下級兵士の、自分に対して、だった。

僕はキャメルを咥（くわ）えてその煙を胸一杯吸い込んだ。

あ・ぁ・ぁ・あの懐かしい上海の香りがふくらんで来る。

「どうだね？アキラ！やってくれるかね？」

アメリカ将校の一言が胸に突き刺さった。なんだ。多寡（たか）が煙草一本くらいで。何故だろう。ジーンと胸が熱くなってきた。鼻の奥に突き上げてくる。

（あっ！オレはどうしたんだ？こんなところで・・・みっともないことはしたくないな。オレは、オレはいくら殴られても泣いたことはなかったのに。涙を見せるなんてそんな恥ずかしいことを・・・オレは絶対にそんな男ではないんだ）

僕は唇を噛みしめ上を向き、横を向き、また上を向いた。火のついたキャメルが手元で震えていた。時が止まっていた。

「どうだい？やってくれんかね？」またスミスが首を傾げて柔らかく訊ねた。

「ハイ！」掠れた声が自然に出た。

スミスはハンクを振り向き、右腕を曲げ親指を立てた。「決まったぜ！」と笑って告げた。ハンクも笑って頷いていた。スミスは一言加えてくれた。

「タシロに危害を加えないよう全日本軍に通達しておけ」

現金な僕は落ち着いてきた。遠く立ち並ぶ将校に目をやって「あの人達は？」と呟いた。

「オレもお前のように正直（オネスト）に言おう。オレは日本の将校は皆嫌いなのだよ」スミスは吐き棄てた口を大きく開けて笑い出した。と、横からハンクが要らぬ口を挟んだ。

「ここに居る兵隊共はな、日本だろうがアメリカだろうが誰も将校を好きな奴はいねぇんだぜ。嘘じゃ無いぜ（オネスト）」

スミス中佐はしばらくハンク曹長を睨んでいたが、一息すると二人は声を併せたように笑い出した。割れるような笑い声だった。

柱時計のメロディが五時を告げた。部屋の兵達が立ち上がって一斉に星条旗に向かい敬礼をしたと思うと、急にバラバラになってスミスのデスクの前を囲んだ。命令がなくとも彼等は業務を終えることができるのだなと理解することができた。

集まった兵たちが笑い出した。聞き耳を立てていたのだろう。笑いが伝わっていった。部屋中の兵がどっと声をあげた。「オレたちゃあ、将校なんて大嫌いさぁ。嘘じゃ無いぜ」兵たちの割れるような合唱に変わって行った。